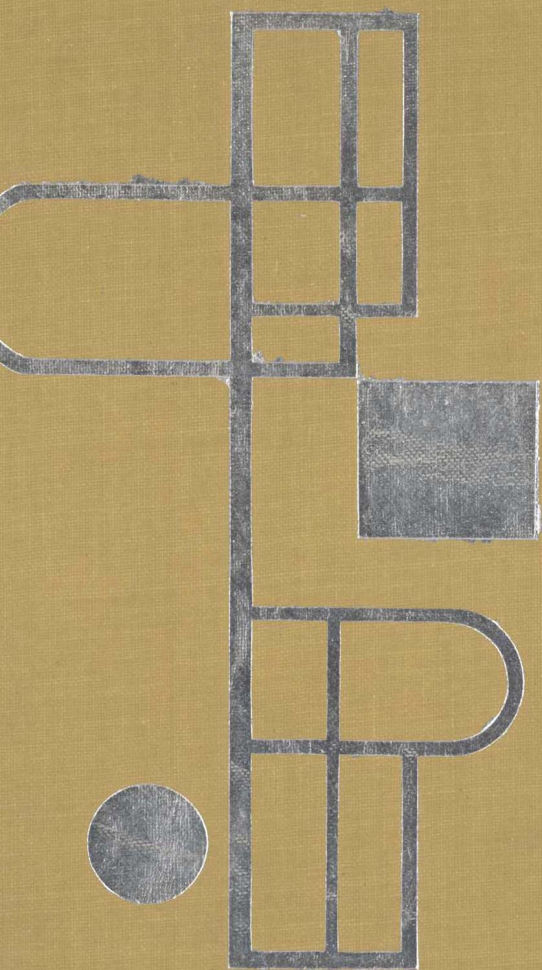


谷崎潤一郎集(二)



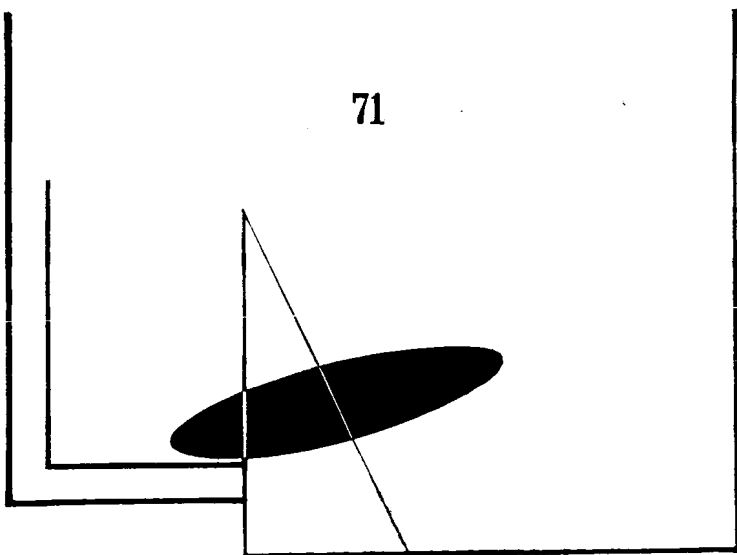
現代日本文學全集
71



谷崎潤一郎 集

(二)

71



筑摩書房版

谷崎潤一郎集 (二)

昭和三十一年四月十五日 印刷
昭和三十一年四月二十日 發行

著 者 谷崎潤一郎
たに さき じゆん いち ちう

發行者 古 田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 山 田 一 雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所 筑 摩 書 房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29)七六五(代表)
振替 東京 一六五七六八

整 版 株式會社 精 興 社
印 刷 株式會社 精 興 社
製 本 有限會社 藤田製本工場

谷崎潤一郎集(二) 目次

細雪……………五

少將滋幹の母……………三四三

陰翳禮讃……………三九三

「細雪」の女(折口信夫)……………四二一

解説……………四一七

裴
頓

恩
地
孝
四
郎

谷崎潤一郎集
(二)

細雪

上 卷

—

「こいさん、頼むわ。——」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入つて來た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけてゐた刷毛を渡して、其方を見ずに、眼の前に映つてゐる長襦袢姿の、抜き衣紋の顔を他人の顔のやうに見据ゑながら、

「雪子ちゃん下で何してる」

と、幸子はきいた。

「悅ちやんのピアノ見たげてるらしい」

——なるほど、階下で練習曲の音がしてゐるのは、雪子が先に身支度をしてしまつたところであらう。悦子は母が外出する時でも雪子さへ家にゐてくれれば大人しく留守番をする兒であるのに、今日は母と雪子と妙子と、三人が揃つて出

かけると云ふので少し機嫌が悪いのであるが、二時に始まる演奏會が済みさへしたら雪子だけ一と足先に、夕飯までには歸つて來て上げる。云ふことでどうやら納得はしてゐるのであつた。

「なあ、こいさん、雪子ちやんの話、又一つあるねんで」

「さう、——」

姉の襟頸から兩肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いてゐた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上つてゐる幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしてゐる色つやは、三十を過ぎた人のやうでもなく張りきつて見える。

「井谷さんが持つて來やはつた話やねんけどな、——」

「さう、——」

「サラリーマンやねん、MB化學工業會社の社員やて。——」

「なんぼぐらゐるもろてゐるのん」

「月給が百七八十圓、ボーナス入れて二百五十圓ぐらゐになるねん」

「MB化學工業云うたら、佛蘭西系の會社やねんなあ」

「さうやわ。——よう知つてゐるなあ、こいさん」

「知つてゐるわ、そんなこと」

一番年下の妙子は、二人の姉のどちらよりもさう云ふことには明るかつた。そして案外世間を知らない姉達を、さう云ふ點ではいくら甘く見てゐて、まるで自分が年嵩のやうな口のき

き方するのである。

「そんな會社の名、私は聞いたことあれへんだ。——本店は巴里にあつて、大資本の會社やねんでなあ」

「日本にかて、神戸の海岸通に大きなビルディングあるやないか」

「さうやて。そこに勤めてはるねんで」

「その人、佛蘭西語出來はるのん」

「ふん、大阪外語の佛語科出て、巴里にもちよつとぐらゐ行てはつたことあるねん。會社の外に夜學校の佛蘭西語の教師してはつて、その月給が百圓ぐらゐあつて、兩方で三百五十圓はあるのやて」

「財産は」

「財産云うては別にないねん。田舎に母親が一人あつて、その人が住んでゐる昔の家屋敷と、自分が住んでゐる六甲の家と土地とがあるだけ。——六甲のんは年賦で買った小さな文化住宅やさうな。まあ知れたもんやわ」

「そんでも家賃助かるよつてに、四百圓以上の暮し出來るわな」

「どうやろか、雪子ちやんに。係累はお母さん一人だけ。それから田舎に住んでゐて、神戸へは出て來やはれへんねん。當人は四十一歳で

初婚や云やはるし、——」

「何で四十一まで結婚しやはれへなんだやろ」

「器量好みでおくれた、云うてはるねん」

「それ、あやししいなあ、よう調べてみんことに

は」

「先方はえらい乗り氣やねん」

「雪あんちゃんゝの寫眞、行つてたのん」

幸子の上にもう一人本家の姉の鶴子がゐるので、妙子は幼い頃からの癖で、幸子のことを「中姉ちゃん」、雪子のことを「雪姉ちゃん」と呼び

ならはしたが、その「ゆきあんちゃん」が詰まつて「きあんちゃん」と聞えた。

「いつか井谷さんに預けたいのんを、勝手に先方へ持つて行かはつてん。何やたいそう氣に入つてはるらしいねんで」

「先方の寫眞ないのんか」

階下のピアノがまだ聞えてゐるだけはひなので、雪子が上つて來さうもないと見た幸子は、

「その、一番上の右の小抽出あけて御覽——」と、紅棒を取つて、鏡の中の顔へ接吻しさうなおちよぽ口をした。

「あるやろ、そこに」

「あつた、——これ、雪あんちゃんに見せたのん」

「見せた」

「どない云うた」

「例に依つてどないも云はへん、『あゝ此の人』云うただけや。こいさんどう思ふ」

「これやつたらまあ平凡や。——いや、いくらかえゝ男の方か知らん。——けどどう見てもサラリマンタイプやなあ」

「さうかて、それに違ひないねんもん」

「一つ雪あんちゃんにえゝことがあるで。——佛蘭西語教せてもらへるで」

顔があらかた出來上つたところで、幸子は「小槌屋吳服店」と記してある疊紙の紐を解きかけてゐたが、ふと思ひついて、

「そやつた、あたし『B足らん』やねん。こいさん下へ行つて、注射器消毒するやうに云うといてんか」

脚氣は阪神地方の風土病であるとも云ふから、

そんなせめかも知れないけれども、此處の家では主人夫婦を始め、ことし小學校の一年生である悦子までが、毎年夏から秋にかけて脚氣に罹り罹りするので、ヴィタミンBの注射をするのが癖になつてしまつて、近頃では醫者へ行く迄もなく、強力ベタキシンの注射薬を備へて置いて、家族が互に、何でもないやうなことにも直ぐ注射し合つた。そして、少し體の調子が悪いと、ヴィタミンB缺乏のせむにしたが、誰が云ひ出したのかそのことを『B足らん』と名づけてゐた。

ピアノの音が止んだと見て、妙子は寫眞を抽出に戻して、階段の降り口まで出て行つたが、降りずにそこから階下を覗いて、

「ちよつと、誰か」

と、聲高に呼んだ。

「——御寮人さん注射しやはるで。——注射器消毒しといてや」

二

井谷と云ふのは、神戸のオリエンタルホテルの近くの、幸子たちが行きつけの美容院の女主人

なのであるが、縁談の世話をするのが好きと聞いてゐたので、幸子がかねてから雪子のことを頼み込んで、寫眞を渡しておいたところ、先日セツトに行つた時に、「ちよつと奥さん、お茶に付き合つて下さいませんか」と手の空いた隙に幸子を誘ひ出して、ホテルのロビーで始めて

此の話をしたのである。實はこちらへ御相談をしないで悪かつたけれども、ぐづ／＼してゐて良い縁を逃がしてはと思つたので、お預かりしてあつたお嬢様のお寫眞を何とものつかず先方へ

見せたのが、一箇月半程も前のことになる。それきり暫く音沙汰がなかつたので、自分は忘れてゐたのであつたが、先方ではその間にお宅さんのことを調べた模様で、大阪の御本家の

こと、御分家のお宅さんのこと、それから御本人のことについては、女學校へも、習字やお茶

の先生の所へも、行つて尋ねたらしい。それで御家庭の事情は何も彼も知つてゐて、いつかの新聞の事件なども、あの記事が誤りだと云ふこ

とはわざ／＼新聞社まで行つて調べて來てゐるくらゐなので、よく諒解してゐたけれども、なほ自分からも、そんなことがあるやうなお嬢様

かどうかまあお會ひになつて御覽なさいと云つて、納得が行くやうに説明はしておいた。先方は謙遜して、蔭岡さんと私では身分違ひでも

あり、薄給の身の上で、さう云ふ結構なお嬢様に來て戴けるものと思へないし、來て戴いても貧乏所帯で苦勞をさせるのがお氣の毒のやう

だけれども、萬一縁があつて結婚出來るならこ

んな有難いことはないから、話すだけは話してみてもいいと云つてゐる。自分の見たところは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしてゐたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残つてゐると云ふのであるから、家柄の點ではさう不釣合でもないではあるまいか。お宅さんは舊家でありになるし、大阪で「蒔岡」と云へば一時は聞えていらしたに違ひないけれども、——かう申しては失禮であるが、いつ迄もさう云ふ昔のことを考へておいでなつては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすつたらいかゞであらうか。現在では月給も少いけれども、まだ四十一だから昇給の望みもないことはないし、それに日本の會社と違つてわりに時間の餘裕があるので、夜學の受持時間の方をもつと殖やして四百圓以上の月収にすることは容易だと云つてゐるから、新婚の所帯を持つて女中を置いて暮して行くには先づ差支へあるまい。人物については、自分の二番目の弟が中學時代の同窓で、若い時からよく知つてゐるので、太鼓判を捺すと云つてゐる。さう云つてもお宅さんの手で一往お調べになるに越したことはないけれども、結婚がおくれた原因は全く器量好みのためで外に理由はないと云ふのが、矢張ほんたうらしく思へる。それは巴里にも行つてゐたのだし、四十を越してもゐることだから、まるきり女を知らない筈はないだらうけれども、自己此の間會つて見た感じでは、それこそ生眞面目

なサラリーマンで、遊びの味などを知つてゐるさうな様子は微塵もなかつた。器量好みなど云ふことは、得てさう云ふ聖人(せいじん)によくあるものだが、その人も巴里に見て來た反動でか、奥さんは純日本式の美人に限る、洋服なんか似合はなくてもよい、しとやかで、大人しくて、姿がよくて、和服の着こなしが上手で、顔立も勿論だけれども、第一に手足のきれいな人がほしいと云ふ注文なので、お宅のお嬢様なら打つてつけだと思ふのであるが、——と云ふやうな話なのであつた。

長らく中風症で臥たきりの夫を扶養しつゝ、美容院を經營して、かたはら一人の弟を醫學博士にまでさせ、今年の春には娘を目白に入學させたと云ふだけあつて、井谷は普通の婦人よりは何層倍か頭腦の廻轉が速く、萬事に要領がよい代りに、商賈柄どうかと思はれるくらゐ女らしさに缺けてゐて、言葉を飾るやうな廻りくどいことをせず、何でも心にあることを剣き出しに云つてのけるのであるが、その云ひ方がアクドクなく、必要に迫られて眞實を語るに過ぎないので、わりに相手に悪感を與へることがないのであつた。幸子も最初、井谷がいつもの急き込むやうな早口でしやべるのを聞いてゐると、随分此の人はと思ふところもあつたけれども、段々聞いて行くうちに、男勝りの親分肌な氣象から好意で云つてくれることがよく分るし、それに何よりも、理路整然と、打ち込む隙もなく話しかけて來られるので、ぐつと俯伏せに取つ

て抑へられてしまつた感じがした。そして、では早速本家の方とも相談をし、又此方でもその人の身元を調べるだけは調べさせて戴いて、その時はさう云つて別れたのであつた。

幸子の直ぐ下の妹の雪子(ゆきこ)が、いつの間にか婚期を逸してもう卅歳にもなつてゐることについては、深い譚(わづらひ)がありさうに疑ふ人もあるのだけれども、實際は此れと云ふほどの理由はない。ただ一番大きな原因を云へば、本家の姉の鶴子(つるこ)にしても、幸子にしても、又本人の雪子にしても、晩年の父の豪奢な生活、蒔岡と云ふ舊い家名、——要するに御大家であつた昔の格式に囚はれてゐて、その家名にふさはしい婚家先を望む結果、初めのうちは降る程あつた縁談を、どれも物足りないやうな氣がして斷り／＼したものだから、次第に世間が愛情をつかして話を持つて行く者もなくなり、その間に家運が一層衰へて行くことと云ふ状態になつた。だから「昔のことを考へるな」と云ふ井谷の言葉は、ほんたうに爲めを思つた親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であつたのはせい／＼大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知つてゐる一部の大阪人の記憶に残つてゐるに過ぎない。いや、もつと正直のことを云へば、全盛と見えた大正の末頃には、生活の上にも營業の上にも放縱であつた父の遣り方が漸く祟つて來て、既に破綻が續出しかけてゐたのであつた。それから間もなく父が死に、營業の整理縮小が行はれ、次いで舊幕時代からの由緒を誇る船場の店舗が他人の手に

渡るやうになつたが、幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大體昔の佛をとめてゐた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであつた。

女の子ばかりで男の子を持たなかつた父は、晩年に隠居して家督を養子辰雄に譲り、次女幸子にも婿を迎へて分家させたが、三女雪子の不仕合せは、もうその時分そろ／＼結婚期になりかけてゐたのに、とう／＼父の手で良縁を捜して貰へなかつたこと、義兄辰雄との間に感情の行き違ひが生じたこと、などにもあつた。いつたい辰雄は銀行家の倅で、自分も養子に來る迄は大阪の或る銀行に勤めてゐたのであり、養父の家業を受け繼いでからも實際の仕事は養父や番頭がしてゐたやうなものであつた。そして養父の死後、義妹たちや親戚などの反對を押し切つて、まだ何とか蹈ん張れば維持出來たかも知れなかつた店の暖簾を、蒔岡家からは家來筋に當る同業の男に譲り、自分は又もとの銀行員になつた。それと云ふのは、派手好きな養父と違ひ、堅實一方で臆病でさへある自分の性質が、經營難と闘ひつゝ不馴れた家業を再興するのに向きなこと考へ、より安全な道を選んだ結果で、當人にすれば養子たる身の責任を重んじたからこそその處置なのであるが、雪子は昔を戀ふるあまり、さう云ふ義兄の行動を心の中で物足りなく思ひ、亡くなつた父もきつと自分と同様に感

じて、草葉の蔭から義兄を批難してゐるであらうと思つてゐた。と、ちやうどその時分、——父が死んで間もない頃、義兄がたいそう熱心に彼女に結婚をすゝめた口があつた。それは豊橋市の素封家の嗣子で、その地方の銀行の重役をしてゐる男で、義兄の勤める銀行がその銀行の親銀行になつてゐる關係から、義兄はその男の人物や資産状態などをよく知つてゐると云ふ譯であつた。そして豊橋の三枝家ならば格式から云つても申分はないし、現在の蒔岡家に取つては分に過ぎた相手であるし、本人も至つて好人物であるからと、見合ひをするまでに話を進行させたのであつたが、雪子はその人に會つて見て、どうにも行く氣になれなかつたのであつた。と云ふのは、別に男振がどうかうと云ふのではないが、如何にも田舎紳士と云ふ感じで、なるほど好人物らしくはあるけれども、知的なところが全くない顔つきをしてゐた。聞けば中學を出た時に病氣をしたとかで上の學校へは這入らなかつたと云ふのであるが、恐らく學問の方の頭は良くないのであらうと思ふと、女學校から英文専修科までを優秀な成績で卒業した雪子としては、さき／＼その人を尊敬することが出来るさうもない懸念があつた。それに、いくら資産家の跡取で生活の保證はあるにしても、豊橋と云ふやうな地方の小都會で暮すことは淋しさに堪へられない氣がしたが、それには誰よりも幸子が同情して、そんな可哀さうなことがさせられるものかと云つたりした。義兄にしてみれば、

義妹は學問はよく出來たかも知れないけれども、少し因循過ぎるくらゐ引つ込み思案の、日本趣味の勝つた女であるから、刺戟の少ない田舎の町で安穩に暮して行くのには適してゐるし、定めし本人にも異存はあるまいと極めてかゝつたのが、案に相違したのであつたが、内氣で、含羞屋で、人前では満足に口が利けない雪子にも、見かけに依らない所があつて、必ずしも忍従一方の婦人ではないことを、義兄が知つたのはその時が最初であつた。

が、雪子にしても、お腹の中ではつきり「否」にきまつてゐることなら、早くさう云へばよいものを、どうとも取れるやうな生返事ばかりしてゐて、いよ／＼となつてから、それも義兄や上の姉には云はないで、幸子に打ち明けたのは、一つには餘りにも熱心な義兄の手前、云ひ出しにくかつたせゐもあらうが、さう云ふ風に言葉數の足りないのが、彼女の悪い癖なのであつた。そのために義兄は内心否でないものと感違ひをし、先方も見合ひをしてからは、急に乗り氣になつて是非にと懸望して來ると云ふ譯で、話は退つ引きならない所まで進んだのであつたが、一旦「否」の意志表示をしてからの雪子は、さうなると義兄や上の姉が代る／＼口を酸くして頼むやうにして勤めても、最後まで「うん」と云ふことを云はないでしまつた。今度は泉下で養父にも喜んで貰へると思つてかゝつた縁談であるだけに、義兄の失望は大きかつたが、それより困つたのは、先方に對し、仲に立つて斡旋

してくれた銀行の上役の人に對し、今更挨拶のしやうがなくて冷汗の出る思ひをしたこと、——それも、尤もに聞える理由があるならばだけれども、顔が知的でないなど、下らぬ難癖をつけて、こんな、二度とありさうにもない勿體ない縁を嫌ふと云ふのは、たゞ雪子の我が儘で、邪推をすれば、故意に兄を苦しい立ち場に陥れてやらうと云ふ底意があるのではないかとさへ、取れないでもなかつた。

それから此方、義兄は雪子の縁談には驚り／＼した形で、他人が持つて来てくれる話には喜んで耳を傾けるけれども、自分が積極的に取り持つことや、先に立つて良い悪いの意見を述べることは、出来れば避けたいと云ふ風に見えた。

三

雪子を縁遠くしたもう一つの原因に、井谷の話の中に出た「新聞の事件」と云ふものがあつた。

それは今から五六年前、當時廿歳であつた末の妹の妙子が、同じ船場の舊家である貴金屬商の奥畑家の粹と戀に落ちて、家出をした事件があつた。雪子をさしおいて妙子が先に結婚することとは、尋常の方法ではむづかしいと見て、若い二人がしめし合はして非常手段に出たもので、動機は眞面目であるらしかつたが、執方の家でもそんなことは許すべくもなかつたので、直きに見つけ出して双方に連れ戻して、そのことはたわいもなく解消したかの如くであつたが、運

悪くそれが大阪の或る小新聞に出てしまつた。而も妙子を間違へて、雪子と出、年齢も雪子の年になつてゐた。當時時岡家では、雪子のために取消を申し込んだものか、但しさうすれば半面に於いて妙子がしたことを裏書きするのと同じ結果を招く恐れがあり、それも智慧のない話であるからいつそ黙殺してしまつたものと、當主辰雄が散々考へたのであつたが、過ちを犯した者はどうあらうとも、罪のない者に飛ぶつちりを受けさせて置く譯には行かぬと思つたので、取消を申し込んだところ、新聞に載つたのはその取消ではなく、正誤の記事で、豫想した通り改めて妙子の名が出た。辰雄はその前に雪子の意見も聞いて見るべきであるとは心付いてゐたのだけれども、聞いたところで取り分け自分に對して口の重い雪子が、どうせ明瞭な答をしてくれさうもないことは分つてゐたし、義妹たちに相談すれば利害の相反する雪子と妙子との間に紛糾することもあらうと考へ、妻の鶴子に話しただけで、自分一人の責任でさう云ふ手段に出たのであつたが、正直のところを云へば、妙子を犠牲にしても雪子の冤を雪ぐことに依つて雪子によく思はれたいと云ふ底意が、いくらか働いてゐたかも知れない。それと云ふのが、養子の辰雄には、大人しいやうでその實いつまでも打ち解けてくれない雪子と云ふものが一番氣心の分らない扱ひにくい小姑なので、こんな機會に彼女の機嫌を取りたかつたこともあらう。しかしその時も當てが外れて、雪子も妙

子も彼に悪い感じを持つた。雪子に云はせれば、新聞に間違つた記事が出たのは私の不運としてあきらめるより仕方がない、取消など云ふものはいつても人目に付かない隅の方に小さく載るだけで、何の効果もありはしない、私達としては、取消にせよ何にせよ一回でも多く新聞に出ることが不愉快なのだから、そつと黙殺してしまふのが賢かつたのだ、兄さんが私の名譽回復をしてくれるのは有難いけれども、さうしたらこいさんはどうなるであらう、こいさんのしたことは悪いには違ひないが、年齒も行かない同士の無分別から起つたこと、すれば、責められてよいのは監督不行届な兩方の家庭で、少くともこいさんについては、兄さんは勿論私にだつて一部の責任がないとは云へない、さう云つては何だけれども、私は自分の潔白は、知る人は知つてゐてくれると信じてゐるので、あのくらゐな記事でそんなにひどく傷つけられる自分であるとは思つてゐない、それより今度のことが原因で、こいさんが僻み出して不良にでもなつたらどうするか、兄さんのすることは萬事理窟詰めで、情味がない、第一これほどのことを、最も利害關係の深い私に一言の相談もせずに實行するとは專横過ぎる、——と云ふのであつたが、妙子は妙子で、兄さんが雪姉ちやんのためを證を立て、上げるのは當り前だけれども、私の名を出さないでも濟ませる方法もあつたらうではないか、相手は小新聞なのだから、何とか手を廻せば伏せてしまふことが出来たらうもの

を、兄さんはさう云ふ場合にお金を吝しむからいけない、——と、此れはその時分から云ふことがませてゐた。

辰雄は此の新聞の事件の時、世間に合はず顔がないと云つて辭職願を出した程であつた。尤もその方は「それには及ばぬ」と云ふことで無事に済んだが、雪子が受けた災難の方は何として償ひやうがなかつた。たま／＼幾人かの方は、正誤の記事に氣が付いて彼女の冤罪を知つたでもあらうが、彼女は潔白であつたにしても、さう云ふ妹娘のある事實が知れ渡つたことは、姉娘を、その自負心にも拘らず、いよ／＼縁遠くする原因になつた。たゞ、雪子自身は内心は兎に角、表面は「それくらゐなことでは傷つきはしない」と云ふ建前でゐたので、そんな事件のために妙子と感情が齟齬する結果にはならず、却つて義兄に對して妙子を庇ふと云ふ風であつた。そして、此の二人は、上本町九丁目の本家から、阪急蘆屋川の分家、——幸子の家の方へ、前からも始終、一人が歸れば一人が來ると云ふ風に、代る／＼泊りに來てゐたのが、此の事件を切掛けにして段々頻繁になり、二人が一緒にやつて來て半月も泊り續けることがあるやうになつた。それと云ふのが、幸子の夫の貞之助は、計理士をしてゐる毎日大阪の事務所へ通ひ、外に養父から分けて貰つた多少の資産で補ひをつけつゝ暮してゐるのであつたが、嚴格一方の本家の兄と違つて、商大出に似合はず文學趣味があり、和歌などを作ると云ふ風であつたし、本

家の兄のやうな監督權を持たなかつたし、いろいろの點で雪子たちには、さう恐くない人なのであつた。たゞ餘り雪子達の滞在が長くなると、本家へ氣がねして「一遍歸つてもうたら」と幸子に注意することはあつたが、幸子は毎度、そのことなら姉ちゃんか諒解してゐてくれるから心配しやはらんでもよい、今では本家も子供が殖えて家が手狭になつたことだし、時々妹達が留守にした方が姉ちゃんも息抜きが出来るであらう、まあ當分は當人達の好きになやうにさせておいても別條はないと云ひ／＼して、いつかさう云ふ状態が普通になつてゐたのであつた。

そんな工合にして數年たつうちに、雪子の身の上には格別の變化も起らなかつたが、妙子の境遇に思ひがけない發展があつたので、結局に於いてそれが雪子の運命にも或る關はりを持つに至つた。——と云ふのは、妙子は女學校時代から人形を作るのが上手で、暇があるとよく小裂を切り刻んでいたづらしてゐたものであつたが、だん／＼技術が進歩して、百貨店の陳列棚へ作品が出るやうになつた。彼女の作るのは佛蘭西人形風のもの、純日本式の歌舞伎趣味のもの、その他さまざまで、どれにも他人の追隨を許さない獨創の才が閃めいてゐたが、それは一面、映畫、演劇、美術、文學等に互る彼女の日頃の嗜みを語るものでもあつた。兎に角彼女の手から生れる可憐な小藝術品は次第に愛好者を集め、去年は幸子の肝煎で心齋橋筋の或る畫廊を借りて個展を開いた程であつた。彼女は最初

本家は子供が大勢で騒々しいので、幸子の家へ來て作つてゐたが、さうなるともつと完全な仕事部屋がほしくなつて、幸子の所から三十分もかゝらずに行ける、同じ電車の沿線の夙川の松濤アパートの一室を借りた。本家の兄は妙子が職業婦人めいて來ることはどうかと思つただけ、殊に部屋借りをするのはどうかと思つたのだけれども、此の時も幸子が口をきいてやつて、——過去にちよつとした汚點を持つ妙子は、雪子以上に縁遠い譯であるから、何か一つ仕事を當てがつておく方がよいかも知れない、部屋借りと云つても仕事をしに行くだけで寢泊りをするのではない、幸ひ友達の未亡人が經營してゐるアパートがあるから、よく頼み込んでそこを借りることにしたらどうであらう、そこなら近い所だから自分も時々様子を見に行くことが出来る、と云ふやうなことを云つて、やゝ事後承諾的に運んでしまつたのであつた。

元來が陽氣な性質の妙子は、雪子とは反對に警句や冗談などを飛ばすと云つた風であつたのが、事件を引き起した當座は陰鬱になつてしまひ、變に考へ込んでばかりゐたが、さう云ふ新しい世界の開けたのが救ひになつて、近頃は以前の朗かさを取り返しつゝあつたので、その點では幸子の見通しが中つた譯であつた。が、本家からは月々の小遣を貰つてゐ、その外に又作品が相當な値で賣れるところから、自然金廻りがよくなつて、時々びつくりするやうなハンドバッグを提げてゐたり、舶來品らしい素敵な靴を穿

いてゐたりした。これには上の姉や幸子が心配して貯金をすゝめたことがあつたが、云はれる迄もなく蓄める方も如才なく蓄めてゐて、ちゃんと郵便貯金の通帳を、上の姉には内證だと云つて幸子にだけ出して見せ、「中姉ちゃんお小遣ないなら貸したげるわ」と云つたのには、さすがの幸子も開いた口が塞がらなかつた。と、或る時幸子は、「お宅のこいさんが奥畑の啓坊と夙川の土手を歩いてはつたのを見た」と云つて、注意してくれた人があつたのではつとした。實は此の間、妙子のポケットからハンカチと一緒にライターが轉け出したのを見て、妙子が隠れて煙草を吸ふことには心づいてゐたが、廿五六にもなつてそのくらゐなこととは仕方がなからうかと思つてゐた矢先だつたので、當人と呼んで聞いてみると、本當だと云ふ筈であつた。そして、だん／＼質して行くと、あれきり啓ちやんとは音信不通になつてゐたのだが、先日人形の個展を開いた時に來て、一番の大作を買つてくれたりしたこと、又附き合ふやうになつた、でも勿論清い交際をしてゐるのだし、それもほんのたまにしか會はない、自分も昔と違つて大人になつてゐるから、その點は信用して貰ひたいと云ふのであつた。しかし幸子は、さうなつて來ると、アパートに部屋を持たせておくことはちよつと不安で、本家に對しても責任があるやうに感じた。いつたい妙子の仕事と云ふものが、氣分本位のものであり、そこへ持つて來ていづばし當人は藝術家氣取でゐるので、

製作と云つても毎日詰めて規則的にするのはなく、幾日も續けて休むこともあり、氣が向くと徹夜で仕事して翌朝腹れぼつたい顔をして歸つて來ることもあり、寢泊りはさせない筈だつたのが、だん／＼さうも行かなくなつてゐた。それに、上本町の本家と、蘆屋の分家と、夙川のアパートとで、さう一々、妙子が何時に彼方を出たから何時には此方へ着く筈だと云ふ風に連絡を取つてゐなかつたことなどを考へると、幸子は少し自分がぼんやり過ぎたか知らんと云ふ氣がして、或る日妙子の留守を窺つてアパートへ行き、友達の女主人に會つていろ／＼それとなく聞いてみたが、女主人の云ふのは、こいさんも近頃は偉くなつて、製作法を習ひに來る弟子が二三人も出來たけれども、それは奥様やお嬢様たちで、男の人と云つては、箱の職人が時々注文を取りに來たり品物を納めに來たりするくらゐに過ぎない、仕事は、やり始めたら凝る方で、午前三時四時になることも珍しくないが、そんな時には、泊る設備もないことだから一服しながら夜の明けのを待つて、一番電車で蘆屋へ歸つて行くと云ふ話で、時間の點なども辻褄が合つてゐた。部屋は此の間まで六疊の日本間だつたのが、最近廣い方へ變つたと云ふので、行つてみると、洋間に一段高くなつた四疊半の日本間の附いた部屋で、参考書、雑誌、ミシン臺、裂地その他の諸材料、未完成の作品等々で一杯になつてゐる、壁に數々の寫眞がピンで留めてあるなど、藝術家の工房らしく

雖然としてはゐるけれども、さすがに若い女の仕事場らしい色彩の花やかさも感じられ、掃除もよく行き届いてゐて、きちんと整理してあり、灰皿の底にも吸殻一つ溜つてゐないと云ふ風で、その邊の抽出、状態などを調べてみて、何等訝しく思はれる節もなかつた。幸子は實は、何か證據のやうなものを發見するのではあるまいかと思つて、それが恐さに出かけて來る時は氣が進まなかつたのが、これなら來てみてよかつたとか心からほつとして、反動的に前よりもなほ妙子を信じてしまつたが、そのまゝ一二箇月過ぎて、もうそのことが忘れられた時分、或る日妙子が夙川へ行つてゐる留守に、奥畑がひよつこり訪ねて來て、「奥様にお目に懸りたい」と云ひ入れた。船場時代にはお互の家が近い所にあつた關係から、幸子も満更知らない顔ではなかつたので、兎に角面會してみると、突然で失禮だとは思つたけれども折入つて御諒解を願ひたいことがありましてと云ふ前置きの後で、先年自分達の取つた手段は過激であつたとは思ふが、決して一時の浮氣心から出た行爲ではなかつたこと、あの時自分達は引き離されてしまつたが、自分はこいさん（「こいさん」とは「小娘さん」の義で、大阪の家庭で末の娘を呼ぶのに用ひる普通名詞であるが、その時奥畑は妙子のことを「こいさん」と云ふばかりか、幸子のことを「姉さん」と呼んだ）との間に、父兄の諒解を得られるまで何年でも待たうと云ふ固い約束をしたのであること、自

分の方の父兄は、最初はいいさんを不良か何かのやうに誤解してゐたが、藝術的才能のある眞面目なお嬢さんであることを知り、又自分達の戀愛が健全なものであることをも知つて來たので、今日では結婚に反對ではないらしいこと、などを語り、それで、こいさんから伺つたところでは、此方はまだ雪子姉さんの御縁がきまらないさうであるが、それがおきまりになつてからなら、私達の結婚も許して戴けると思ふと云ふことなので、こいさんとも相談の上で僕がお願ひに出たのである、自分たちは決して急ぎはない、適當な時期が来るまで待つが、たゞ自分達がさう云ふ約束をした間柄であることを、此方の姉さんだけは分つてゐて戴きたい、そして自分達を信用してゐて戴きたい、尙又、いつの日にか本家の兄さんや姉さん達の方を然るべく執り成して、自分達の希望を遂げさせて下さるなら更に有難い、此方の姉さんは一番理解がありになり、こいさんの同情者であられると伺つてゐたので、こんな勝手なお願ひをするのだけれども、——と云ふのであつた。幸子は一往伺つてだけおきますと云ふ風な挨拶をして、承知したともしないとも云はずに歸したが、奥畑が話した程度のことなら、まるきり想像してゐないでもなかつたので、そんなに意外には感じなかつた。正直のところ、一度新聞にまで謳はれてしまつた間柄である以上、二人を一緒にさせるのが最良の道であることは分つてゐたし、本家の兄や姉達も結局は同じ考に落ち着くこと

と思つてゐたのであるが、たゞ雪子の心理に及ぼす影響を慮つて、出来ればその問題は先へ延ばして置きたかつたのであつた。で、その日、奥畑を送り出したあとで、しよざいな時にはさうするのが癖の、ひとり應接間のピアノに向つてあれこれかと譜本を引つぱり出しながら弾いてゐるところへ、頃合を測つて夙川から戻つたのであらう、妙子は何氣ない顔をして這入つて來たのを見ると、幸子はちよつと手を休めて、

「こいさん」と云つた。

「——今奥畑の啓ぼんが歸つて行かはつた」

「さうか」

「あんだ達のこと、あたしには分つてゐるけれど、——今のところ何も云はんと、任しといへな」

「ふん」

「今持ち出したら、雪子ちゃん可哀さうややつてにな」

「ふん」

「分つてゐるやう、こいさん」

妙子は間が悪いらしく、強ひて無感覺な表情をして「ふん」「ふん」とばかり云つてゐた。

四

はじめ幸子は、妙子と奥畑との最近のいきさつを雪子にも誰にも話さずにゐたが、或る日又二人が散歩して夙川から香櫨園へ行く途中阪神國道を横切らうとすると、通りかゝつた阪國バス

から雪子が降りて來て運悪く出遇つてしまつたと云ふことを、雪子は黙つてゐたけれども、そのことがあつて半月も過ぎた時分に妙子から聞いた。で、さうなつてから云はずにゐて妙子が變に誤解されるやうなことがあつてもと思つたので、此の間奥畑の訪問を受けて以來の事譯を語り、雪子ちゃんの縁がきまつてからでよいので、急ぐことではないけれども、いづれあの二人は一緒にさせなければならぬであらう、その時になつたら本家の諒解を得るために雪子ちゃんにも一と骨折つて貰はなければ、——と、云ふやうに話して雪子の顔に現れる反應を窺つたが、雪子は別段のこともなく物靜かに聞いてしまつてから、順序が違ふと云ふだけの理由で延ばすのなら、そんな氣がねをせず、先に二人を一緒にしたらよいと思ふ、私は後になつたところで打撃を受けもせず、希望も捨てはしない、自分は自分で幸福な日が廻つて來るやうな豫感があるから、——と、それが皮肉でも負け惜しみでもなく取れるやうに云つた。

しかし當人はどう思つてゐるにしても、姉妹の順で行かなければならぬことだし、妙子の方にはもう極まつてゐるやうなものだとすると、なほさら雪子の縁談を急ぐ必要があつた。が、ざつと以上のやうな事情が彼女の婚期を後らせた原因になつた外に、もう一つ雪子を不仕合せにしたのは、彼女が未年の生れであることであつた。一般に丙午をこそ嫌ふけれども未年の生れを嫌ふ迷信は、關東あたりにはないことなので、

東京の人達は奇異に感じるであらうが、關西では、未年の女は運が悪い、縁遠いなど、云ひ、殊に町人の女房には忌んだ方がよいとされてゐるらしく、「未年の女は門に立つな」と云ふ諺であつて、町人の多い大阪では昔から嫌ふ風があるので、ほんに雪子ちゃん縁遠いのもそのせいかも知れないなど、本家の姉は云ひ云ひした。それやこれやで、だん／＼兄や姉たちもさうむづかしい條件を出しては無理だと云ふことが分つて來、此方は初婚なのだから先方も同様でなければと云つてゐたのが、二度目の人でも子供さへなければと云ひ出し、次いで子供も二人までならと云ひ出し、年も二番目の義兄貞之助より一つや二つ上であつても外見が老けてさへるなければ、と云ふところまで折れて來るやうになつた。雪子は義兄達や姉達の意見が一致した時なら、何處へでも云はれるまゝに縁づくと思つてゐ、それらの條件にも不服を唱へはしなかつたけれども、たゞ、子供がある場合にはなるたけその子供が可愛い、顔だちの女の子であつてほしい、さうすれば自分が本當に可愛がる事が出来るやうな氣がするから、と云ひ、四十何歳と云ふ年の人を夫に持つのだとすれば、もうその人の立身の限度も大凡を見えてゐて、さき／＼収入が殖える當ても少いことだし、此方が未亡人になる可能性も多いことだから、大した財産は要らないにしても、老後の生活を保證するだけの用意のあることが望ましいと云つてゐたが、此の後の注文は本家や分家

の者達も至極尤もなこととして、條件の一つに加へてゐた。

井谷の話はさう云ふところへ持ち込まれた譯なので、大體に於いて此方の注文と餘りかけ離れてはゐなかつた。財産がないと云ふことだけが條件に外れてゐるけれども、その代り四十一と云ふので、貞之助より一つ二つ若く、従つてまだ將來がないと云ふ年ではない。姉の夫より年上でもとは云つたやうなもの、勿論さうでなく濟めばその方が體裁がよく、それに越したことはないのである。そして、何より彼より一番よいことは相手が初婚であると云ふ一事で、これは、或は望めないことではないのかと諦めかけてゐたゞけに、最も此方の食指が動く點であり、此の先さう云ふ口はめつたに見付かりさうもなく思へた。要するに、外に少しぐらゐ不満足なところがあつても、初婚の一事はそれらの總べてを補つて餘りあるものであつた。それから、その人が俸給生活者であるとは云ふものの、佛蘭西仕込みで彼の地の美術文學にも多少通じてゐるらしいことは、恐らく雪子に氣に入るであらうと幸子には思へた。と云ふのは、知らない人は誰も雪子を純日本趣味のお嬢様とばかり取りがちだけれども、それは服裝や體つきや言語動作から受ける表面の感じで、あれで實際は必ずしもさうでなく、現に今も佛蘭西語の稽古をしてゐるし、音楽などは日本物より西洋物の方により理解があると云ふ風なのである。幸子は内々MBB化學工業會社に手藝を求めて、

その、姓は瀬越と云ふ人の評判などを問ひ合せて見、外へも手を廻して調べて見たが、どの方面で聞いても人格について悪く云ふ人は一人もないので、まあ此の邊が良い縁かも知れない、いづれ本家とも相談をして、と思つてゐると、今から一週間程前、突然井谷が蘆屋の家へタキシエを乗りつけて、先日のお考へ下すつたでせうかと、と云ふ催促と共に先方の寫眞を持つて來た。例の井谷の疊みかけるやうな話ぶりなので、此方はこれから本家と相談をするところ、とは、いかにも悠長らしくて云ひ出せず、大變結構な御縁だと思つて只今先方様のことを本家の方で調べてゐるところですから、後一週間もたちましたら御挨拶に出られる積りです、と、ついさう云つてしまふと、かう云ふ話は早いに限りますから、その氣があらになるのでしたら、出来るだけお急ぎになつた方がよくはないでせうか、瀬越さんの方は毎日電話で「まだかまだか」と矢の催促で、兎に角僕の写真もお目に懸けて、ついでに様子を伺つて來て下さいと云はれましたので、ちよつとお立寄りしたのです、では一週間後にきつと御返事を、と、五分ばかりの間にこれだけのことを手短かにしやべつて、待たして置いたタキシエに飛び乗つて、直ぐ又歸つて行つてしまつた。

幸子は萬事上方式に氣が長い方なので、假にも女の一生の大事をさう事務的に運ばうと云ふのは亂暴な思ひもしたけれども、井谷に譬を叩かれた形になつて、行動の遅い彼女にしては珍

しく、明るく日上本町へ出かけて行つて姉にあらましの話をし、返事を急かされてゐる事情などを打ち明けて云つてみたが、姉は又幸子に輪をかけた氣の長さなので、さう云ふことにはひとしほ慎重で、惡くない話とは思ふけれども一往夫にも相談してみても、よければ興信所に頼んで調べて貰ひ、その上でその人の郷里へも人を遣つて、など、なか／＼暇が懸りさうなことを云ふのであつた。で、本家があゝ云ふからにはとても一週間やそこらでは埒が明くまい、早くても一と月は懸ると見たので、何とかしてその間を引つ張つて置く積りでゐると、ちやうど約束の一週間が切れた昨日、又タキシードが家の前で停つたので、はつと思ふと案の定井谷が這入つて来た。此方が慌てゝ、昨日又本家の方を急かしてみましたところ、大體異存がないらしいのですけれども、まだ調べの行き届かない點があるから、もう四五日待つて戴きたいやうに云つてゐますので、と、言譯しかけるのを皆まで聞かずに、大體御異存がないのでしたら、細かい調べは後にして、兎に角本人さん同士會つて御覽になつたら如何でせうか、見合ひと云ふやうな形式張つたことでなく、私が兩方を晩の御飯にお招きすると云ふことにしますから、御本家の方達はおいで下さらないでも、此方の御夫婦がお附添ひ下されば結構です、先方は非常にそれを望んでられるのですが、と、退つ引きならぬやうに云つた。井谷にしてみれば、此の姉妹たちは少し思ひ上りすぎてゐる、人が熱

心に奔走してやつてゐるのに、いつ迄悠長なことを云つてゐてどうする氣だらう、そんな風だから婚姻に後れてしまふのではないか、ちと眼が覺めるやうにしてやらなければ、と云ふ腹があるもので、なほさら押つ被せるやうに云ふのであつたが、幸子にも、うす／＼その氣持が分らないので、ではいつ、と云ふと、急なお話のやうですけれども明日の日曜にして戴けると瀨越さんも私も大變都合がよいのですが、と云ふ。明日は訖約がありまして、と云ふと、では明後日と、直ぐ疊みかけて来るので、それなら大概明後日と云ふことに置いて、しかとしたところは明日の午頃電話で御返事申しますからと、さう云つて歸つて貰つた昨日の今日のことなのである。

「なあ、こいさん、——」

と、幸子は、引つかけてみた衣裳が氣に入らないで、長襦袢の上をばつと脱ぎすて、別な疊紙を解きかけてゐたが、ひとしきり止んでゐたピアノの音が再び階下から聞えて來たのに心付くと、又思ひ出したやうに云つた。

「實はそのことで、難儀してるねん」

「そのことで、何のこと」

「今、出かける前に、井谷さんに何とか電話で云うとかんならん」

「何で」

「あの人、昨日又やつて來やはつて、今日にも見合ひさしてほしい云やはるねんが」

「あの人、いつもそんなやで」

「正式の見合ひと違つて、一緒に御飯たべるだけやさかい、そんなに堅苦しい考へんと、是非承知してほしい云やはつて、明日は都合が悪い云うたら、そんなら明後日は如何です云やはるよつてに、どうにもいや／＼云ふこと云はれへんねん」

「本家はどない云うてるのん」

「姉ちゃん電話に出て來て、行くのんやつたらあんた等が附いて行きなさい、私等が附いて行つたら後で引つ込みがつかんことになるさかいに云ふねん。——井谷さんもそれでえいとは云うてはるねんけど」

「雪姉ちゃんば」

「さあ、それやがな」

「いや／＼云ふのんか」

「いやとは云うてえへんけど、……ま、昨日來て今日明日のうちに見合ひせうて、そない輕々しう扱はれたうない云ふのんが、ほんたうのことやないやろか。何せはつきり云うてくれへんさかい分らんねんけど、もうちよつとその人のことを調べてからでもえい／＼やないか云うて、何ぼす／＼めても行かう云ふこと云うてくれへんねん」

「そんなら、井谷さんにどない云ふのん」

「どない云はう。——何とかちやんとした理由云はなんなら、何處までも追究されるにきまつたあるし、……今度のこととはどうなるにしても、あの人怒らしてしめて、此の先世話して貰へんやうになつたら難儀やし、……なあ、こいさん